

第17回 SSOR 報告

勉強、遊びを通して OR ワーカー、研究者間の交流を深めた

木村 俊一

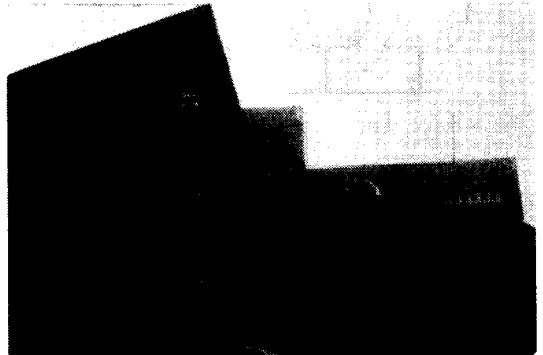
昭和40年に始まった SSOR は、今夏は8月25～28日の4日間、飯綱高原(長野市)を舞台に、“OR入門”をテーマとしてその第17回目の会合が催された。今回は、東京工業大学が幹事校にあたり、筆者を事務局長、情報科学科大学院生の大曾根 匡君、進藤 晋君、水野真治君らを庶務、会計とする計4人で事務局が構成された。会場となったいこいの村・アゼイリア飯綱は、飯綱山を真近に仰ぎ、野鳥の声も時折聞こえる林の中にあり、標高が1200mに近いためか下界とは隔絶した涼しさをわれわれに提供してくれた。

折しも西ドイツのボンで数理計画国際シンポジウムが開催されていたため、SSOR への参加者が少ないのではと危惧されたが、案に相違して、昨年とほぼ同数の67名(大学・企業：44名、学生：23名)の参加者を得たのは事務局としても喜ばしいかぎりであった。

SSOR という言葉の由来については、その創始者たちの間でも諸説紛々の感があり、明確には定義されていない。しかし、今回はあえて、Summer Symposium on Operations Research の略語という比較的固い解釈で通すことにした。これは、いかなる定義を用いるにせよ、SSOR の本質が若手OR研究者の勉強および親睦の集いであるということには何の変りもないと考えたからである。だが、結果として、シンポジウムの形式が例年以上にはっきりと前面に押し出される格好になったことは否めない事実である。

今回のプログラム作りに関しては、これまでにない幾つかの新機軸を盛りこむことを当初から計画していた。その1つは、SSOR 第1日目の特別講演である。これまで第1日目は、受付事務が済んだ後は何となく始まっているという、けじめがはっきりしない感じがいつもつきまっていた。これを拭うために、今回は森村先生に無理を承知で講演をお願いしたところ、先生は快く引き受けてくださった。

2番目の新機軸は、先に述べたシンポジウム形式の強



会場外観

化である。あらかじめ4つのセッションとそのオーガナイザーを設定し、各オーガナイザーを通じて講演依頼をしていただいた。この際、“OR入門”というテーマを考慮して、講演内容は修士課程学生向け程度の tutorial なものを特にお願した。これらのセッションとオーガナイザーはそれぞれ次のとおりである。

ゲーム理論(武藤滋夫、東北大学)、数理計画法(鈴木久敏、東京工業大学)、信頼性(鳩山由紀夫、専修大学)、待ち行列(木村俊一、東京工業大学)。

3番目の新機軸は、予稿集を作ることであった。これまで薄い冊子が用意されたこともあったが、主に財政上の理由により、講演資料の準備は講演者自身の負担になることがほとんどであった。講演者の負担を軽くし、SSOR の歴史を記録として留めるためにも予稿集作りは不可欠であり、このためにはまず寄付金をつのることから始めなければならなかった。幸いにも、鳩山由紀夫氏の協力を得て、次の各企業からご寄付をいただくことができた。

トヨタ自動車(株)、(財)日本科学技術連盟、野村証券(株)、日立製作所、ブリヂストンタイヤ(株) (五十音順)。

この紙面を借りて、お世話になった各社の総務担当の方々にお礼を申し上げたい。この寄付金の一部は、学生の参加費を低く抑えるためにも使わせていただいた。

きむら としかず 東京工業大学

◇プログラム◇

- 8月25日(水)夜：特別講演
「事例研究のすすめ」 森村英典(東京工業大学)
- 8月26日(木)午前：ゲーム理論
「非協力ゲームの均衡概念」岡田 章(東京工業大学)
「仁の一般化について」 中山幹夫(富山大学)
- 8月26日(木)午後：数理計画法
「数理計画問題における Max-Min 関係について」
大山達雄(埼玉大学)
「凹関数最小化と切除平面」今野 浩(東京工業大学)
- 8月27日(金)午前：信頼性
「信頼性における統計的手法」 宮村鐵夫(茨城大学)
「システムの構造と確率的挙動について」
大鈞史男(大阪大学)
- 8月27日(金)午後：待ち行列
「待ち行列における測定の問題について」
町原文明(日本電信電話公社)
「定常状態確率の数値計算について」
高橋幸雄(東北大学)
「OR on Queues」 森 雅夫(東京工業大学)
- 8月28日(土)午前：数理計画法
「大規模非線形計画問題と動的計画法」
大野勝久(京都大学)

これらいずれのご講演も講演者の方々の創意工夫がなされた興味深いものばかりであった。とりわけ岡田章氏の講演は、非協力ゲームの種々の均衡概念間の関係がその歴史的経緯とともに整然とまとめられていて、筆者のごときゲーム理論の門外漢にも非常にわかりやすいものであった。また森雅夫氏は、Interface 誌における待ち行列理論の有用性に関する論争を紹介されたが、内容自体のおもしろさに加えて数式がほとんど使われていないこともあって、多くの参加者の好評を得ていた。だが全体的には“OR入門”というテーマからは少し内容の程度が高いのではという印象を受けた。事前の内容に関する打合せをもう少し徹底すべきだったと反省させられた。

講演時間は1件90分と充分長い時間をとったつもりだったが、いざ実際にお話ししていただくと、質疑応答の時間が足りなくなってしまうなかなか予定どおりにはいかなかった。しかしそこは泊りがけの利点で、各セッション終了後に遅くまで論議が交わられていたようである。

SSOR では以上のような“お勉強”に加えて、“お遊び”の時間も充分とは言えないまでもある程度配慮しており、今回は会期中テニスコート2面、麻雀卓4卓を借りきって、参加者に自由に使っていただいた。台風が

ちょうど西日本をかすめていたために風が少しあったが天気はまずまずで、多くの方が講演の合間にテニスで汗を流されていた。夜は第2日目の懇親会に加え、毎夜酒場と称する部屋で酒を酌み交す機会を設けた。懇親会では各自簡単な自己紹介をしていただき、これまで名前しか知らなかった方々をより身近に感じることができた。一方、酒場では、これまでまったく面識がなかった人や専門分野が異なる人とも気軽に話ができて、いわゆる「顔見知り」を増やすことができたように思われる。筆者自身、第11回以来毎回 SSOR に参加させていただいているが、この酒場での話らいがその後の人付き合いの中で大きな影響を与えていたと感じており、ORワーカー、研究者の間の交流を深めるという意味において、学会の春・秋の研究発表会や懇親会にはない重要な役割を果たしていると思う。したがって、はじめに“お遊び”と書いたが、それはそれで SSOR の中で必要不可欠な存在といえるだろう。

幸いにして、事務局長である筆者自身が、テニスで、しかも受付開始以前に捻挫をした以外これといった事故もなく無事に閉会できたことをまず喜ぶべきだろう。捻挫をしてみて、やはり慣れないことはするべきでないと言文字どおり痛切に感じたが、と同時に、思うように歩けなかったために参加者の皆さんへの幹事としての責任が充分に果せなかったのではないかと自分の不明を恥じている次第である。(それにしても、会期中、この捻挫のために酒が飲めなかったのは残念でした。嗚呼！)

最後に、今回を含めここ数年間の SSOR で多少気になることを1つ。それは、学生参加者の積極性のなさである。参加学生の大学が京都大学や東京工業大学等の特定校に集中しているせいもあるが、仲間内で固まってしまい他大学の同年代の者との交流をみずから放棄してしまっている姿は何とも情けないし、もったいない気がする。せつかく高い交通費を払ってきているのだから、もっと積極的に人付き合いの努力をすべきではないだろうか。学生参加者が特定校に集中し、しかもその絶対数が減少していることには、事務局にもその責任の一端があるが、何より、学生を引っぱって連れてきてくれる年代の者の数が不足しているのが大きな原因と考えられる。このところ次第に高齢化しつつある参加者の平均年齢を下げ、SSOR をより活性化するためにも、この年代に相当する25~35歳の人たちの協力が必要である。

来年の第18回 SSOR は、広島大学が幹事校となって大山で開催される予定である。事務局の中心となるのは、尾崎俊治(広島大学)、海生直人(広島修道大学)両氏であり、若手の海生氏に大いに期待したい。